

第7章 むかしのこと



横浜へ行ってきた翌々日――。

井上さん夫妻は孫たちと一緒にクリスマス・イブを過ごすことになった。

「うちで夕食を準備するから、ぜひきてちょうだいな」

そう洋子が電話で招待してきたのだった。

「おかげさまで真也もだいぶ立ち直ったようだし、みんな楽しんでみよう」

そのことを伝えると、とたんに奥さんは浮き浮きはじめた。奥の部屋から衣装ケースを抱えてきて、よそ行きの冬服を引っ張り出した。

「クリスマス・パーティーのご招待なんて、何年ぶりかしら」

「娘や孫たちと夕飯を食べるだけなんだよ。そんなに着飾ることもあるまい」

だいぶ前に、外資系の家具メーカーが催したクリスマス・パーティーに招待されたことがある。技術提携の話がまとまりかけたときだった。夫婦そろっての招待だったので、奥さんは大あわてでドレスを新調した。

——あれは、まだ四十代^{だい}だったもんな。

井上さんは思いだし笑い^{わら}いを浮かべた。

——地味^{じみ}なドレスだったけど、よく似合^{にあ}つてたよ。

井上木工所^{もっこうじふ}の名が海外のメーカーにも知られはじめたころだった。井上さんの設計^{せつけい}した家具^{かぐ}が注目^{ちゅうもく}され、同じデザインの家具類^{かぐるい}をアメリカで製造^{せいぞう}、販売^{はんばい}したいという話が舞^まい込んだのだった。けつきよくのところ交渉^{こうしやう}はまとまらなかったが、そのことは日本国内での井上木工所の評価^{ひやうか}を高める結果^{けつこ}となった。

——いまになつて思うと、あのころが華^{はな}だったのかもしれないな。わざわざパーティー用のドレスを誂^{あつら}えたのも、あれが最初^{さいしょ}で最後^{さいご}だった。

きつと奥^{おく}さんも、そのときのことを思いだしているのだろう。

「いつそのこと二十年前のドレスを着てつて、みんなをびつくりさせたかどうかだね？」

井上さんが冗談^{じやうだん}を言^いうと、とたんに奥^{おく}さんは不機嫌^{ふきげん}になつて、とがめるような視線^{しせん}を向けてきた。せつかくの楽しい気分^{きぶん}を壊^{こわ}してしまつたらしく、

「あのドレスなら、とつくにございませぬ。次の年には、洋子の高校のチャリティーバザーに出^でしちゃいましたもの」

と、いつにない硬^{かた}い口調^{くちやう}で応^おじた。

「あんなのを着て、みなさんの前へ平気で出^でたと思^{おも}つと、恥^はずかしくて仕方^{しかた}がないわ」

「いや、よく似合^{にあ}つてたよ。とっても素敵^{すてき}だった」

「もう、よしてください。……いいわ、いつものセーターを着ていくから」

奥さんはさつさと衣装ケースを奥の部屋へ戻して、ふだんのセーターを着た。もともと身を飾りたてるほうではないから、よそ行きも必要な数着しか持っていないはずだ。そのうえ引越してくるときに、だいぶ整理しなければならなかった。

「孫たちと一緒に過ごすんだから、ふだんのまんまがいちばんだよ。あらたまった格好をしちゃ、みんなが落ち着かないと思うよ」

「そうね。……ところで、あなた、クリスマス・プレゼントはどうします?」

「うん、考えてあるよ。……真也くんのをね」

「じゃあ、わたしは優香ちゃんに、なにか考えましょ」

「ああ、頼むよ」

井上さんは、ほっとしていた。奥さんのようすが、ふだんどおりに落ち着いているからだ。じつは奥さんに聞かれるまで、プレゼントについては考えていなかった。

——しっかりしてるな。なにも心配することはないようだ。

二人は、それぞれにプレゼントの準備をはじめた。

井上さんが奥さんに聞かれてすぐ思いついたのは、道具箱に入っている肥後守だった。井上さんが子どものころから持っている折りたたみ式の小刀だ。鉄製のツカは、そのなかに刃を折り込めばサヤとなる。このツカ兼用のサヤには「肥後守」と刻印してある。

だいぶ使い込んであるが、ほかの道具類と一緒に年に一度、ていねいに研いであるの

で切れ味はいい。これを、いつか真也に譲ろうと思っていた。

奥さんは、身のまわりの小物をしまつてあるバッグから、なにか取りだしている。それをだいたいそうにハンカチで包んだ。井上さんに見られているのに気づいて、わざとらしく胸の上で両手のてのひらにはさみ込んだ。

「ひみつ。……どうせ、いつか形見にあげようと思つてたものよ」

「おいおい、縁起でもないことを言うなよ」

けつきよく二人はブレゼントを見せ合わずに、孫たちのもとへ行くことになった。

その夜のパーティーは、思いのほかにぎやかだった。

洋子の夫も早めに帰宅していて、井上さん夫妻を玄関に出迎えた。

「さあ、どうぞ。……おかげさまで、真也も元氣になりました」

と、いつになくにごやかに挨拶をした。

「恥ずかしいんですが、わたしの手には負えなくて、すっかりお世話になりました」

「いや、真也くんは、わたしの仕事を手伝ってくれたんだ。こっちのほうが、お礼を言わなくちゃならない。とつても優秀な助手だったよ」

そう答えながら井上さんは、父親の後ろに立っている真也へ笑いかけた。真也は嬉しそうに微笑み返したが、前のような無邪気な明るさは、まだ戻っていないようだ。

ダイニングへ招き入れられると、あらまあ、と奥さんがはずんだ声で言った。

「すごいご馳走なこと。……まるで外国映画みたい」

小ぶりなクリスマス・ツリーが部屋の隅に飾ってあり、色とりどりの豆電球がまたいた

ていた。テーブルの大皿に七面鳥の丸焼きが載っていて、茹でたブロッコリーやジャガイモやトマトが添えてある。ほかにマカロニサラダやチーズの盛り合わせ、焼きたてのクッキーもあって、井上さんも若いころに奥さんと観たアメリカ映画のシーンを思いだした。

席に着くと、さっそくワイングラスに白ワインが注がれた。

洋子の夫が、井上さん夫妻と洋子と子どもたちに向けてグラスをかがげ、

「じゃあ、みんなの健康を祝して。……メリー・クリスマス」

と、ぎこちない口調で言った。

おそらく洋子から、そうしてちやうだいと言われたのだろう。

大人たちがワインを飲むあいだに、真也と優香が「きよしこのよる」をうたった。これも、きつと洋子の演出にちがいない、と井上さんは思った。

ふと、三十四年前のことが、井上さんの頭のなかによみがえった。

——あのときも、似たようなことがあったな。

まだ諏訪で暮らしていたころ、洋子が四歳になった誕生日だった。

奥さんに言われて、父親をバースデイ・パーティーに招待した。孫の成長を祝ってもらいたいのはもちろんだった。だが、それ以上に、結婚してから一度も訪ねてくれない父親に、ぜひともきてほしいという前々からの奥さんの願いでもあった。

孫娘の誕生祝いだからと言うと、父親は渋々ながらも出席してくれた。それまでに何度

か洋子を工房へ連れていったが、そのころの父親はいつも当惑したような顔で孫娘を見つめ、ほんの数秒のあいだ抱き上げるだけだった。

その日、相変わず当惑した面持ちでやってきた父親は、少し酔っているようだった。どこからかケーキを買ってきていた。準備してあったバースデー・ケーキと同じような、ホイップクリームとイチゴで飾られたケーキだった。

テーブルには近所の店から取り寄せた寿司桶があり、奥さんの手料理も添えてあった。ビールを注いで乾杯となったが、日本酒はないか、と父親が言いだした。あいにく用意してなかった。あわてて買いにいこうとする奥さんを、父親が憮然として押しとどめ、ふいにポケットから祝儀袋を取りだして幼い洋子へ手渡した。

「おめでとう。……それじゃ、はつはつ帰らしてもらうか」

と言つて、さつさと席を立つてしまった。

まだバースデー・ケーキのろうそくを吹き消す前だった。井上さん夫妻は茫然として、父親を見送った。洋子が幼い声で、さよなら、とつぶやいた。

「あれは、きつと照れくさかったんだよ」

ずっとあとになって、そう井上さんは奥さんに言った。

「おやじは慣れてなかったから、どうしていいのかわからなかったんだ」

けつして弁護するつもりではない。ふだんの父親を見ていれば納得せざるをえないことだった。連れ合いを早くに失い、かわりに木と木工道具を愛してきた父親は、息子をふく

めて、ほかへの愛情をあらわすべを知らなかったにちがいない。まして家庭的なふんいきに満たされた場所では、わが身の置きどころに困ったのだらう。

——たしかに当惑してしまふよな、こういう席は。

いま、井上さん自身も、そう感じている。

——家族のパーティーなんて、照れくさくて、あんまり居心地のいいもんじゃない。

こんな思いを、奥さんや洋子に知られたら、きつと不興を買うにちがいない。しかし、正直なところ、早めに切り上げてもらいたかった。

料理を食べたあと、洋子がデコレーション・ケーキをキッチンから運んできた。もうたぐさんと、と井上さんは内心ひそかに思った。それが表情に出たのだろうか、

「いまは、おなかいっぱいだから、ケーキの前にプレゼントを交換しようよ」と、遠慮がちに洋子の夫が言いだした。

「なあ、真也、リーリとエーバへのプレゼントもあるんだよな」

子どもたちが先を争って部屋の間へ向かった。洋子はケーキと一緒にキッチンへ戻っていった。真也と優香がクリスマス・ツリーの下からリボンのかかった包みを持ってきた。

「はい、これはリーリに。……そつちはエーバにだよ」

二人は、それぞれ包みを差しだすと、奥さんが、あらまあ、と驚いた声を上げた。「プレゼントをもらうなんて、ほんとにひさしぶりだわねえ」

「ほんとだな。……どうもありがとう」

井上さんは包みを両手で受けとりながら、ますます当惑していた。

洋子の家族からクリスマス・パーティーに招かれたのも初めてだし、プレゼントをもらうのも初めてだ。これまでは忙しくて、こうした行事に加わったことがなかった。

ねえ、開けてみて、とうながされて、井上さん夫妻は真つ白な包装紙をひらいた。

「おお、これはいい。……ちようど欲しかったんだよ」

濃いブルーの毛糸で編まれた手袋だ。散歩のとき、いつもポケットに両手を突っ込んでいるのを、洋子が真也が見ていたのだろう。奥さんのもベアの手袋だった。

「じゃあ、われわれからも二人へプレゼントしようかな」

井上さんはポケットから封筒に入った肥後守を取りだして真也へ手渡した。奥さんもハンドバッグから、ハンカチに包んだものを大切そうにつまみ上げ、優香へ差し出した。

「わあ、すげえ。……これって、ほんもの？」

と、真也が興奮ぎみに言った。

井上さんがサヤから刃を引きだして見せながら、

「いいかい、こうして使うんだ。気をつけないと、手を切っちゃうぞ」

扱い方を教えていると、テーブルの向こうで優香がはしゃぎ声を上げた。

「ママ、エーバから、きれいなものもらったよ。ほら、こんなに光ってる」

その手に真珠のペンダントが載っていた。純金のチェーンの先に大ぶりの真珠が光っている。井上木工所が最初のヒット製品を生み出したとき、その記念にと井上さんが贈った

ものだ。結婚してから、初めてのプレゼントだった。

「あら、だめよう。エーバったら、だいじなものを」

洋子が大急ぎで、娘の手から取り上げた。あまりの勢いに、優香が驚いて顔をこわばらせた。洋子は問いかけるように井上さんのほうを見つめていた。

——なんか、お母さんのようす、変じゃない？

ペンダントのことは、子どものころから知っているはずだった。

「どういふつもりなのよ、これは大切な記念品でしょ？」

「いいのよ、いつかは優香にあげようって思ってたんだから」

奥さんが泰然として答えた。優しげな微笑みも浮かべている。

仕方なく井上さんは、洋子へうなずいて見せた。

——本人がいつて言ってるんだから、かまわないさ。

どれほど経済的な危機におちいろうと、井上さんは奥さんのものに手をつける気はなかった。会社が倒産したときも、その後わずかな年金で暮らすことになっても、それだけは守ってきた。だから、奥さんがペンダントをどうしようと、なにも言うつもりはない。

——早めに孫娘へ譲っておいたほうが、今後、だいじな記念品をなくしてしまう心配がなくていいと考えたのかもしれないな。

そう思うことにして、井上さんは洋子へ告げた。

「せっかくのエーバの気持ちなんだ。遠慮なく、もらっといたほうがいい」

洋子はしばらくためらってから、ペンダントを娘の手へ返した。

せっかくのパーティーが白けたふんいきになってしまった。洋子の夫が気をきかせたつもりでか、さあ、ケーキにしようよ、と明るい声を上げた。

「ねえ、その前にパパとママからのプレゼントは？」

と、真也もとりなすように言った。

「まさか、サンタクロースが運んでくるなんて言うんじゃないでしょ？」

「そうだったな。ちゃんと用意してあるさ。……ほら、その紙袋がそうだよ」と指さしたところへ、子どもたちが歓声を上げて駆け寄った。

真也がデパートの包装紙をひらいて、派手な絵のついた箱を取りだした。

「うわお、ゲームソフトだ。ほくの欲しかったやつだよ」

「あたしのも見てえ。かわいいミッフィーちゃん」

優香が両腕にあまるほどのウサギのぬいぐるみを抱きしめた。

肥後守とペンダントはテーブルの上で、それぞれの光をたたえていた。

井上さんは、またしても居心地のわるさを感じた。

やがてケーキを一切れ食べたあと、井上さんは席を立ちながら告げた。

「そろそろ、おいとまするよ。おかげで今夜は楽しかった」

「クルマで送るから待つて」

そう洋子は言ったが、井上さんはさりげなく断った。

「なに、エーバと二人で歩いて帰るよ。……ママはワインを飲んだしね」

みんなが玄関まで見送ってきたが、そこまで送っていく、と真也が言いだした。

連れだつて外へ出ると、頬を切りつけるような寒さだが、風はなく穏やかだった。

「ねえ、リーリ。さつきはナイフ、ありがとう。……あのね、もうひとつ、もらいたいものがあるんだけど、いいかなあ」

「ほう、なんだね？」

「チビの引き綱。……ママはリーリに返しなさいって言っただけど、ぼくはそばに置きたいの。チビのこと、もうしばらく思いだしていたいんだ」

「いいとも、気のすむまで置いといたらいいさ」

「ありがとう。じゃあ、さよなら。気をつけてね」

真也は立ちどまり、右手を小さく上げて二人を見送った。

井上さん夫妻は肩をすぼめ、身体を寄せ合つて歩きつづけた。

「洋子の四歳の誕生日に、おやじを招いただろう」

と、井上さんがつぶやくように言った。

「……あれが家にきてくれた最初で最後だったな」

「そうでしたね。わたしがお酒を用意しておかなかったばかりに」

すぐに応じたところを見ると、奥さんも三十四年前のことを思いだすことがあるのかもしれない。悔いているような口ぶりだった。

「お酒のせいじゃないさ。おやじは、あんな場面にや馴染めなかったんだよ」

「そうかしら」

「きつとそうだよ。……ようやく、おやじの気持ちがわかってきたよ」

「言われてみれば、そうかもね」

奥さんの声には、かすかな笑みがにじんでいた。

井上さんは、思わず頬をゆるめた。

「あのペンダントをプレゼントにするとは思わなかったよ」

「いけなかった？」

「いや、よかったと思うよ」

「洋子ったら、やきもち焼いたのかしら」

ふふ、と奥さんが笑いだした。

二人は暗い道で、ちよつとのあいだ声をたてて笑った。

翌朝、井上さんは九時すぎにアパートを出た。

ライティングデスクを修理するため、世田谷へ出張することになっていた。

亡母の形見にもらったデスクのふたが壊れていた、という。写真を送ってもらって検討

してみたところ、壊れているのは、ふたに取り付けてある鍵の部分らしい。

さっそく旧知の木内金具製作所から該当する鍵金具を取り寄せることにした。

電話をかけて依頼すると、わざわざ電話口に出てきた社長の木内さんが、
「やっと動きはじめましたね、井上さん」

と、安心したように言った。

「そうこなくちやいけません。どうぞ、がんばってください」

注文した鍵金具は、その翌日には宅配便で届けられた。

せっかく特急で手配してもらったのだから、年内に修理しなければ、と思った。さっそくお客へ連絡すると、ぜひともお願いします、ということだった。

井上さんは道具入りのバッグを提げて駅まで歩いていき、私鉄電車に乗った。
ラッシュアワーを避けたから、車内はそれほど混んではいなかったが、座席は空いていなかった。重いバッグを提げたまま、吊り革につかまって車窓の風景を眺めた。

——おやじと別れたのは、あの洋子の誕生日から二年後だったな。

このところ、ひとりではんやりしていると、まるで待っていたかのように父親との記憶がよみがえるようになった。いまだに、わだかまりが胸の底に淀んでいるせいだろう。

——工房をやめたいと言ったら、仕事で忙しかったおやじは背中を見せたまま、黙ってうなずいただけだった。こわもてで反対されるのを恐れて、長いあいだ言いだしそびれていたのに、あつけないぐらい簡単に決着がついてしまった。

きつと、引き止めてみてもむだだと知っていたにちがいない。自分に似て、一度こうと決めたら、けっしてあきらめないだろう、と思っていたのかもしれない。

けつきよく元気な父親を見たのは、そのときの後ろ姿が最後ということになった。

その後も二年ほど、同じ諏訪で木工家具の仕事をしていたのだが、そのあいだ父親とは一度も会うことがなかった。ときおり奥さんが洋子を連れて工房を訪ねていたが、父親は洋子を膝に抱き上げて微笑みかけるだけだったらしい。

——おやじは怒ってたんだろうな。なにしろ長年かけて育てた職人が二人も、わたしについてきてしまったんだから。もつとも、彼らが勝手についてきたんだが。

二十代半ばの弟子たち二人が、井上さんの知らないうちに辞表を出した。長いあいだ同じ釜の飯を食べてきた弟のような若者たちだった。けっして引き抜いたわけではなく、井上さんを慕っていた彼らが、どうしても一緒に働きたいと言って追ってきたのだった。

そのため父親の工房に残ったのは、いわば子飼いの弟子とされる四十代の職人が二人だけとなった。いずれは彼らも独立して、それぞれの出身地へ帰ることになっていた。

——みんなは、わたしが跡を継ぐものだと思っていたようだが、おやじとわたしの関係は、とつくのむかしに、そんな期待をされるようなものじゃなくなっていた。

中学を卒業してから二十年のあいだ父親について木工を学んできた。しかし、父親の技術は継承しても、その作風まで受け継ぐつもりはなかった。つまり父親と同じものをつくりつづけていこうという気は、まったくなかったのだ。

できることなら、父親の工房で新しい木工家具をつくっていきたかった。しかし、父親はそれを拒絶した。自分の一生をかけて生み出した作品の数々を、息子につくりつづけさ

せるのが夢であり、それが後継者の役割だと思つていたのだろう。

そのことに真つ向から対抗して、これまでにない新しい木工家具をつくりだそうとした井上さんを、父親としては認めるわけにかなかったのも当然だったろう。

——出ていっても、いずれ帰つてくると、おやじは思つてたんだ。

名もない職人が小さな工房で新製品をつくりだしても、それを容易に受け入れてくれるほど世の中は甘くはない。あまたの職人たちが伝統の技術を駆使して、しのぎを削つている木工業界で、ぼつと出の職人が一人前に扱つてもらえるわけがないし、取り引きしてくれる卸し業者や家具店などあるわけがない。

そう父親は確信していたにちがいない。

ともかく一度は厳しい現実に触れてくるのもわるくない。その苦い経験が、いつか工房を経営していく上で役に立つこともあるはずだ。

そんな思いを胸にひそめて、あのととき父親はうなずいてみせたのかもしれない。

——たしかに、その予想は正しかったかもしれない。多くの日本人の暮らしが、それまでの状態でつづいていたら、きつとおやじの考えどおりになつただろう。

しかし、その後の現実には、父親の思惑から大きくズレてしまった。

井上さんが工場をやめた翌年には、東京の多摩丘陵に多摩ニュータウンという巨大な集合住宅の町が出現した。それまでの公園住宅よりも、さらに合理的に洋風化した各戸に備えられたのは、ダイニングテーブルを中心とした洋家具だった。

この傾向は、それからの一戸建て住宅にもはつきりあらわれるようになった。部屋の多くが板張りの床となり、それに合わせて家具もほとんどが洋式になっていった。

——わたしの家具が注目されたのは、たまたま時代に合ったんだよ、おやじさん。

井上さんは車窓の外を眺めながら、胸のうちに父親へ語りかけていた。

——その幸運のおかげで、東京へ出て井上木工所を創業することができたんだ。

めまぐるしく移動していく家々のあいだに、ときおり暗い冬空が見えかくれした。そのたびに父親の苦渋に満ちた顔が、ほんの瞬間、浮かんで消えた。

出張先の家は、新宿から小田急線に乗り換えて七つ目の駅にあった。

電話でくわしく聞いておいたので、ほとんど迷うことなく行き着けた。古い建築だが、大きな邸宅だった。大谷石の塀がめぐらされ、鉄製の門扉が閉ざされていた。門柱に取り付けてあるインタホンで名を告げると、門扉が自動的に開いた。

——こんな豪邸にも井上木工所のライティングデスクがあるとはな。

井上さんは玄関までの前庭を通りながら、こそばゆい気持ちになっていた。

迎えに出てきたのは、五十代前半ぐらいに見える和服姿の婦人だった。

「ごころづきさま。……どうぞ、お上がんなさい」

彼女は上がりがまちに突っ立ったまま、こちらの風体を確かめるように見つめてきた。

井上さんは最敬礼をして、姿勢を低くしながら、おもむろに靴を脱いだ。電話でやりと

りしたときから、人を見下すような話し方に気がついてた。

偉そうにふんぞりかえっている相手には、よけいな抵抗を示してはいけない。おおせのとおりには、はいはい、と頭を下げていくにかぎる。ここで目を合わせたりすると、こちらの胸中に湧いている不快感がじかに伝わってしまうおそれがある。

「こつちへどうぞ。……一時間ぐらいで済むかしら？」

廊下の先へ案内しながら聞いてきた。いきなりだったので、井上さんは戸惑った。

「はあ、それは拝見してみせんと、どうにも」

「お客さまが見えるのよ。それまでに済ませていただきたいわ」

「では、とにかく努力してみましよう」

そう答えるはかなかった。ほんとうは、身をひるがえして帰ってしまいたかった。

ライティングデスクは奥の納戸にあった。白木に上質のラッカー塗装をほどこしたデスクが二十八年を経て、美しい飴色の照りをやどしていた。

横浜で修理したベンチよりも、かなり前につくったものだ。井上木工所を創業してまもなく、アメリカの家具専門誌に載っていた写真を参考にデザインして、製品化したデスクだった。そのころはまだ量産するつもりはなかったので、井上さん自身がオーダーメイドのような気の入れ方で仕上げた記憶がある。

「たしか亡くなったお母さまが愛用されていたということでしたね」

「そうなの、なんでも父がなにかのお祝いに贈ったとか聞いているけど」

「なるほど。……どれ、拝見（はいけん）しましょう」

幅（はく）九十センチ、奥行（おくゆ）き四十センチの小（こ）ぶりなデスクだ。天板（てんぱん）の奥（おく）と両（りょう）サイドを、高さ二十センチほどの衝立（つたて）状（じょう）の枠（わく）がこんでいる。これに、なだらかなカーブをもたせたシャッターのようなふたが付（つ）いていて、ふだんは天板（てんぱん）の上（う）をおおっている。

このふたをデザインするのに、当（た）時は二カ月（げつ）もかかった。いくつもの細（こ）い板（いた）をつなぎ合わせて、滑（すべ）りのいいシャッターを設計（せっけい）するのに、さらに三カ月（げつ）かかった。

「ははあ、鍵（かぎ）がかかっているのを無理（むり）に開（ひら）けましたね」

やはり写真（しやしん）を見たときに思ったとおりだ。ボールの先（さき）かなにかを、ふたと天板（てんぱん）のあいだのすきまにさし込（こ）んで、無理（むり）やりこじ開（ひら）けたようだ。

「鍵金具（かぎかなぐ）はかりか、ふたと天板（てんぱん）も大きく欠（か）けてしまってます」

「ひどいわねえ、いい年（とし）をした弟（あに）たちがやったのよ」

不機嫌（ふきげん）そうに、彼女（かのじょ）は言（い）った。

「鍵（かぎ）が見（み）つからなくて。みんな、頭にきちゃったのね」

「へええ、頭にきてやったんですか？」

井上（いの上）さんは腹（はら）立たしくて、つい皮肉（ひにく）な口調（くちよう）になった。

こともあるうに母親（はは）が大切（たいせつ）にしてきた形見（かたみ）を壊（こわ）してしまうとは。

「いくら探（さが）しても鍵（かぎ）がないって。……このなかを調べただけなのに」

「鍵（かぎ）を開（ひら）ける専門（せんもん）家に頼（たの）むこともできたでしょうに」

「とにかく相続のことで急いでたから。……母が書き遺したものがあるかと思って」

「そうでしたか、なるほど」

その先は、もう聞きたくもなかった。彼らは亡くなった母親のデスクのなかに遺言状が隠されていると思い込んで、ふたをこじ開けたらしい。

「それで、これ修理できるの？」

「まあ、完全に元どおりにするのは無理ですね」

「でも、形見を捨てちゃうわけにもいかないし、困ったわねえ」

デスクを見下ろしている彼女の横顔は、ほんとうに廃棄処分にしようかと考えている感じだった。井上さんは急いで提案した。

「ともかく鍵金具を用意してきましたから、それだけでも交換しておきましょう。ふたと天板の欠けた部分を修理するには、一時間じゃとうてい無理ですんでね」

「じゃあ、お願いするわ。……このままじゃ母に叱られちゃうから」

「できるだけのことはいたしますよ、亡くなられたお母さまのためにも」

井上さんは、さっそく壊れた鍵金具を取りはずしにかかった。

来客を迎える準備をするのか、彼女は納戸から出ていった。

一時間後、鍵の部分だけでなく、ふたと天板にも応急修理がほどこされた。

じつは写真で壊れた部分を仔細に検討し、木粉を混ぜた速乾性のパテを用意してきた。これを欠けた個所に塗りつけると、ほとんど傷跡がわからなくなった。

「まあ、元どおりになったじゃないの」

戻ってきた彼女が、壊れた部分に目を近づけて驚いたように言った。

「さすがねえ、やっぱり職人さんはすごいもんだわね」

「ご満足いただけましたか？ それでは早々に退散いたします」

「あら、そうなの。じゃあ、お代はおいくら？」

「鍵金具も入れて、一万五千円でございます」

少し高いかな、と思いながらも正当と思われる額を告げた。

過つて破損したものではないから、これはアフターサービスにできない。しかも、あまりに荒つぽく壊されたので、パテを塗りつけて補修するという、本来の木工仕事でないことまでしなければならなかった。

井上さんは、まだ腹を立てていたのだ。しかし、相手は動じるようすもなかった。

「お安いのね。これなら、またお願いしたいわ」

玄関を出て、例の鉄扉が開くのを待ちながら、井上さんは苦笑していた。

——おやじなら、壊された状態を見ただけで、さつさと帰ってきただろうな。

そう思ったが、ほどなく門を通り抜けたあとで、さらに苦笑ってしまった。

——そうか、おやじなら、あんなふうに簡単に壊される家具はつくらないか。

六十半ばをすぎて、いまさらながらに父親の存在が大きく感じられる。亡父の頑なほどの厳しい姿勢が、とても懐かしく頼もしく思えるのは、なぜなのか。

ひとりごと ● だいじなもの

いま、ぼくは、すごく怒ってる。

だってママったら、クリスマス・イブにリーリからもらったナイフを、

「これは危ないから、もっと大きくなるまで使っちゃダメ」

なんて言っけとりあげて、どこかに隠しちゃったんだもの。

すごくよく切れそうだったし、使い方をまちがえたと手を怪我しちゃうって、リーリも言っけた。だけど、危ないからって、とりあげるのはおかしいと思うんだ。

そんなに危なかったら、ぜったいリーリはくれなかったはずだし、へたな使い方をしなければ怪我なんかしない。よく切れるから危ないっていうなら、キッチンにある包丁だって危ないじゃないか。もちろん料理をしないから、ぼくは触ろうともしないけどや。

「いいじゃないか。肥後守なら、ぼくだって子どものころ使ってたよ。鉛筆を削ったり、工作の時間に木を切ったりしてたもんだ」

パパが応援してくれただけ、ママはダメって言いつづけた。ぼくの見つけられないとこに隠したのも、学校へ持ってたらいへんだから、なんだそつだ。

「学校に持ち込んでいけない規則になってるの。パパのごろとはちがうのよ」

ママがこわい顔して言うと、それっきりパパは黙ってしまった。なんだか知らないけど、ちゃんとした理由があるんなら、それを教えてもらいたいよ。

プレゼントしてくれたリーリに、なんて言ったらいいんだろ。

ママって、このごろおかしいんじゃないか。イブのとき、エーバがくれたプレゼントをいきなり優香からとりあげたのも、どう考えたっておかしい。せっかくエーバがくれたものを、なんの権利があつてとりあげたりするんだよ。

ナイフのことは頼んだけど、ぼく、リーリからもっともいいものをもらったんだ。チビの引き綱？　ちがう。

じつは、リーリからもらったのは、かたちのあるもんじゃないのさ。

ぼく、横浜のお客さんの家で、ひいお祖父さんがつくったという座卓を見たとき、リーリにや黙ってたけど、すごく感動しちゃったんだ。だって、あのリーリにもお父さんがいて、リーリが子どもだったころから座卓なんかつくってたんだぜ。

その座卓が、いまでも知らない人の家にあつて、何十年もたつてから、リーリとぼくの前にあらわれたんだよ。これって奇跡みたいで、ほんと、びっくりじゃないか。

ひいお祖父さんの座卓を見たときのリーリの顔も忘れられないけど、そればかり

じゃないんだ。あのときの、びっくりした気持ちも、ほくは一生、ぜったい忘れられないと思う。

あれって、ひいお祖父さんからリーリにつながってきたものが、ほくにもつながってるってことを、ほくがはつきり知らされた瞬間だったんじゃないかな。

だから、ナイフをとりあげられても、ほくにや素敵なプレゼントが残ってるのだ。